

介入日	介入コード	介入理由・前回からの評価	実施内容	子どもの反応	保護者の反応	今回の介入評価と次回への提案
3月	B-p3,5	初回面談時の課題について、その後のかかわりを確認するために介入した。	前回の課題について話し、その後の様子を聞いた。 Aくんへのかかわり方を両親で相談できていること、両親のかかわり方が良いからこそAくんがかわってきたことをしっかりと伝えた。母親が頑張っていることを認めて、褒め称えた。	CNSがAくんに声をかけると、CNSの顔をみる。「今日はどうして病院に来たのか」と聞くと、「点滴をする」と答えた。	前回CNSと面談した内容を父親に話していて、父親も協力していると話していた。 母親から、「ちゃんと病院に行くことを話している。Aも病院に行く日がわかっていて、前の日には準備をしている、もっていくゲームを決めている」と話があった。笑顔で話している。	外来に治療にくることを説明できている。Aくんは治療(点滴)に来ることを分かって、来院できるようになった。親が意識してかわることで、Aくんが変化していることを実感している。次の段階として、病気をどのようにAくん伝えていくかを医療者と一緒に考えていくこととした。
3月	D-c2	前回介入から3か月が経過している。その後の評価のために介入した。	外来Nsは毎回、「今日はどうする」と、Aくんの希望を聞いた。動くと危ないこと、1回で終わらなくなることを説明して、動かないことを約束した。「偉くなったところをCNSに見せよう」とAくんに声をかけた。	ひとりで椅子に座って点滴をする。針を刺す瞬間は、「痛い、痛い」と大声を出す。針を刺す瞬間は腕を引いてしまうため、Nsが押さえている。 母親に褒められると、顔	暴れなくなったことを「動くって、わかったんだと思う。成長したよな」と話していた。Aくんをみて、「偉くなったよな」と声をかけている。	毎週外来で点滴をしている。外来Nsとの関係性が築けている。外来Nsの介入がAくん大きく影響し、嫌だと思っても頑張ることができるようになってきている。
7月	B-p3,4,5 A-1	「病気のことをいつ頃教えたらいいんだろう」と母親から相談があった。	Aくんへの説明について、転びやすいこと、上手に走れないことは、そういう病気であると説明する。そのために点滴(薬)をして治療をしている」と伝えることを提案した。病態を伝えることではなく、病気によってどのような症状が体に現れているか、Aくんが自覚している症状で説明すると理解しやすいとアドバイスした。 Aくんとのかかわり方について、両親はAくんの状態や心理的な変化をきちんと察知して、適切に対応していると伝え、褒めた。母親が自信を持てるようにかかわった。	「おはようございます」「さようなら」と医療者と挨拶ができるようになった。 Aくんが自分でNsや医師に体調を伝えることがない。幼稚園では「疲れた」「できない」と自分から言うことがある。	「Aくんが自分はみんなと違うと思っている、同じようにできないと感じている、他の子よりもいろいろなことが遅いからAとしてもそれが嫌なんだと思う」とAくんのことを捉えている。 CNSの提案に「それなら伝えられる。自分でわかっていることなら、説明すればわかると思う」と話し、納得した様子であった。	母親はAくんが自分の身体に関心を持ち始めていることを察知することができる。Aくん説明していくタイミングとしては適している。 母親は病気や治療について、Aくん説明することが大事であることを理解している。 両親からAくんに、病気のことを徐々に、折に触れて、説明していくことができると思われる。 Aくんが自分の病気をどのように捉えている(理解の程度)か、家族と一緒に把握していく。 外来時は、医師・看護師からもAくんに説明をしていくことが必要である。

幼児後期3

介入日	介入コード	介入理由・前回からの評価	実施内容	子どもの反応	保護者の反応	今回の介入評価と次回への提案
	D-c1 c-p3	前回からの評価のために介入	<p>外来Nsは、「今日はどこにやろうか」とAくんを選択できるように声をかけた。</p> <p>針を刺し、刺入部を固定、手をどのように固定するか、Aくんと相談しながら行った。</p> <p>全く動かず、頑張れることを褒めた。母親に声をかけ「すごく偉くなったんですね。さすが小学生ですね」と母親と一緒に成長を認め、褒めた。</p>	<p>点滴をするときは、ひとりで椅子の座って、机の上に自分から腕を出す。針を刺すときは大声は出さない。腕もまったく動かさずにできる。</p>	<p>母親は笑顔でAくんの顔を触りながら褒める。「すごく成長しましたね。こんなに変わるんだね、驚いちゃうね。」「ずっとこれ続けなくちゃならないから、それをどう思うのかな」とCNSに話した。</p> <p>Aくんの成長に一番影響したのは、弟が点滴をするとき「僕は平気だよ」と言って、動かず、泣かずに、最初から一人でできた場面を見たこと。兄としてのプライドが成長につながったと感じている。</p>	<p>母親が感じているように、弟が点滴を頑張る姿を見たことが、Aくんの力を引き出すきっかけとなった。他者とコミュニケーションをとるAくんにとって、外来Nsと関係性を築けたことも大きな力となっている。目標は達成できている。</p>
翌7月	E-p5,6	<p>学校の先生や友達に説明すること、協力を得ることができず、困っていた。</p> <p>直面している問題として、「運動会の種目に参加させてもらえない」と困っていた。</p>	<p><アセスメント></p> <p>母親は学校と調整する方法が分からない。</p> <p>保育園の対応と学校の対応が違うことに戸惑っている。</p> <p>担任教員との関係性がまだ築けていないことも不安につながっている。</p> <p>⇒学校生活で制限されることについて、具体的な内容を主治医と相談をして、主治医から参加を許可する手紙を出すことを提案した。また、学校の先生に外来にきてもらうこと、CNSから学校に電話をすることもできると話した。</p> <p>小学校と保育園の違いを説明し、丁寧にかかわってくれていた保育園から、環境が変わり、Aくんと母親が戸惑っている思いを共有できるように傾聴した。</p>	<p>CNSが学校は楽しいと聞くと、首をかしげる。</p> <p>担任の先生の名前を聞くが答えない。</p>	<p>母親は、学校の先生に「無理をさせずに、Aくんのペースでできる範囲でやらせてほしい」とお願いしただけなのに、学校側は、何でもかんでもダメと言って制限される。保育園のときは保育士がAくんのことをよく知っていてくれたので、できることはやらせてもらえたと感じていて、学校の対応に不満をもっていた。</p>	<p>母親は困ったときに、適切に相談をすることができている。</p> <p>CNSが話した内容は理解している。まずは母親が自分で学校の先生に相談することができると考える。</p> <p>その結果を踏まえて、病院側がどの程度、サポートするかを相談することにした。</p>

介入日	介入コード	介入理由・前回からの評価	実施内容	子どもの反応	保護者の反応	今回の介入評価と次回への提案
			<p>学校教員は病気と今のAくんの病状がよく理解できないため、教員も不安であると。なので、できるだけ具体的に、Aくんができることを手伝いが必要なことを伝えるように。家族はできるだけAくんがすることはやらせたいと考えていることもしっかりと伝える、などのアドバイスした。</p>		<p>CNSとの面談のあと「ああ、そうか、学校の先生に話していいのかもしれないよ。私たちがAの病状はよくわからないから、学校の先生はもっとわからないよね。先生に話して、病気だから特別って思われるの嫌だったから、あんまり言わなかった。うるさい親って思われるんじゃないかなと考えたりして。話して大丈夫ってわかれば、先生と話せると思う。話してみる」と話していた。</p>	
11月	B-pl	<p>両親から「大きくなっていく先がみえない。どうなるのか想像ができない」「この先、学校と上手く付き合っていけるかな」という言葉が聞かれた。</p>	<p>外来NsとCNSで相談。母親がAくんの成長してく先を考えられるようになるため、また学校とどのように調整しているかなど、実際に経験している同じ病気の中学生(Nくん)に会ってもらうことを提案した。</p> <p>酵素補充療法を行っている同じ病気の患児(Nくん)と母親との面談を実施した。</p>	<p>点滴中は寝ていた。覚醒後、NくんとNくんの母親がAくんに挨拶するが、Aくんは返答しなかった。</p>	<p>Aくんの母親とNくんの母親は、ともに涙ぐみながら会話をしていた。診断された当初の不安な思い、子どもの身体的な変化、学校の環境にかんする思いを話していた。</p>	<p>Aくんの母親は人見知りをする、思いを伝えることが苦手なタイプであるが、今回の面談は、母親が「話をすることができてよかった」と思える結果であった。同じ病気を抱える子どもの家族と話すことで、同じ立場だからこそ共有できる思いを言葉にすることができたと考えられた。セルフケアの促進、自己決定能力の育成、学校との連携について、母親の意識を高めることにつながった。</p>

学童前期1

学童前期1

子どもの年齢:学童前期 病名:慢性消化器疾患 介入対象者:子ども・母	面談時間:1回30分 面談場所:外来	経過:学童前期に人工肛門造設。退院後に、便回数の増加や腹痛が食後に起こりやすい状態であったこと、排便や皮膚ケア、食事摂取に関するセルフケアが促進できていないこと、社会集団に参加できていないことから介入を開始した。
--	-----------------------	--

介入日	介入コード	介入理由・前回からの評価	実施内容	子どもの反応	親の反応	今回介入の評価と次回への提案
12月	C-c 67 A-3	術式に起因した下痢や腹痛の出現に伴い、肛門周囲の皮膚ケアや食事に関するセルフケアが促進されていない。	本人と母の3者で面談する。現在の疾患の捉え方や困っていること、自分が考えておこなっていることを聴く。	母が同席していないとオープンな質問に対してはうまく伝えられない。症状の有無や痛みが出現する状況については伝えることが可能。便回数が多く、漏れてしまうことがありおむつ使用している方が安心と言う。肛門周囲が荒れて痛みがあること、食事をした後で腹痛が出現することがあるため、給食が緊張して食べられないと話す。	子どもが自分の気持ちを伝えられるように誘導している。家での様子は、母より聴取する。排便回数は多い時で6回ほどだが、食事後に腹痛が出現するのが怖いようだと言っている。	まずは肛門周囲の痛みを無くすこと、腹痛について自分でマネージメントできるように介入してみる。肛門周囲の荒れに対して外来医師と皮膚・排泄認定看護師(WOC)と相談。薬剤塗布による改善を図る。腹痛が出現する食事と出現しない食事について、次回外来までに提示してもらうように提案し、食事と腹痛の関係について一緒に考えていく。
	E-c 1,2,3	登校することができておらず、学校に行くことに自信がもてない。	登校することに対する本人の想いについて聴く。現時点では、学校に登校できることを褒める。		朝はゆっくり食事をして、学校に行けるときは2限目から出席していること、便が漏れるのが怖くて給食は食べずに午前中で帰ってしまうことを話す。	学校に登校できることを支持すると共に、まずは腹痛が起らないように食事管理する体験が重要。上記の介入を優先する。
2月	A-3	術式に起因した下痢や腹痛の出現に伴い、肛門周囲の皮膚ケアや食事に関するセルフケアが促進されていない。	本人と母の3者で面談する。腹痛が出現する食事と出現しない食事をもとに、食事と腹痛の関係について一緒に考えていく。	簡単な質問には答えられる。症状や健康状態については、母が代弁して答える様子有。 ・給食はたまに食べていること、便が漏れるのが嫌なので学校にもおむつを使用していることを話す。 ・下痢をする時に腹痛が出現することを話す。便性に形があれば体調	子どもが自分の気持ちを伝えられるように誘導しながら、母が代弁することが多い。体調が良くなってきたこと、食欲が出てきたこと、家庭での食事は脂肪が少ないものを作っていると話す。	肛門周囲の痛みが消失していることが苦痛緩和になっている。腹痛と下痢の症状がつながってきていること、食べると下痢をする食事がわかってきていることから、自分でマネージメントできるようになってきている。引き続き、食事と腹痛の関係について一緒に考えていく。

学童前期1

介入日	介入コード	介入理由・前回からの評価	実施内容	子どもの反応	親の反応	今回介入の評価と次回への提案
	E-c 1,2,3	登校することができておらず、学校に行くことに自信がもてない。	学校に登校できることを褒める。	が良い時と。 ・食べると腹痛・下痢が出現する食べ物がある。(ケーキ、脂肪が多いもの) ・学校は2～3限目までに延長できる。	朝はゆっくり食事をして、学校には2限目から出席し、給食をとって3限目までいられるようになったと、本人が少しずつできるようになったことを認めている。	学校に登校できる時間が増え、母も本人の体調が回復していること、できることが増えてきたことを認知し言葉にできている。
4月	C-5,6 A-3	術式に起因した下痢や腹痛の出現に伴い、肛門周囲の皮膚ケアや食事に関するセルフケアが促進されていない。	本人と母の3者で面談する。 食事と腹痛の関係について一緒に考える。	簡単な質問には答えられる。 症状や健康状態については、母が代弁して答える様子は変わらず。 ・腹痛はほとんど無くなっている。便回数が減ったと報告があった。 ・体育にもできそうな内容であれば自分で選んで参加している。 ・学校は2～3限目までだが、ほとんど休まずに登校できている。	母が本人に確認しながら代弁する。本人もできたことは報告してくれる。	腹痛や下痢など症状がコントロールできていることを本人が自覚しており、自分で食事や運動を選択できるようになっている。自分のコントロール感が持てたことで介入は中止でよいと判断する。 母も本人の「できる」ことを認めており支持している。親子関係に問題は感じられず。
	E-c 1,2,3	登校することができておらず、学校に行くことに自信がもてない。	学校に登校できることを褒める。	・学校は2～3限目までだが、ほとんど休まずに登校できている。	本人が給食や体育の参加など自分で選択できることを喜んでいる。	学校に登校できる時間が増え、本人なりに社会参加できる時間や内容が増えている。介入は中止でよいと判断する。

子どもの年齢:学童前期 病名:神経・筋疾患 介入対象者:子ども・母	面談時間:20分程度 面談場所:外来	経過:原因不明の筋力低下、低換気があり、気管切開、長期人工呼吸器管理。筋力が弱く運動発達は遅れ気味であったが、2歳前後で独歩可能となった。知的発達の遅れはない。経口摂取可能であるが、量が確保できないために栄養剤の経口摂取で補っている。現在は、普通小学校の普通学級に通っている。夜間のみ人口呼吸器使用。筋力が弱いので、他の子の動きについていけず、急な姿勢変換ができないので、集団の中で行動する際に、本人の恐怖感が強い。対人関係の課題として、一方的なコミュニケーションになりやすく、特定のお友達とのけんかが多いことが社会性の面で問題になっているため介入となった。
---	-----------------------	---

介入日	介入コード	介入理由・前回からの評価	実施内容	子どもの反応	親の反応	今回の介入評価と次回への提案
6月	B-c3.4	・神経疾患のため、気管切開している。夜間呼吸器使用。転びやすさがある。摂食嚥下障害があり、長期経管栄養であったが、少しずつ経口摂取できるようになり、現在は、ほぼ経口摂取(柔らかか食)で、経口栄養剤を補食している。 ・小学校1年生から、地元普通小に通学している。看護師が別室に待機し、適宜吸引をする。小1の時は、母親が送迎、一部母親付き添いであったが、現在は母親の付き添いなし。 ・スピーチカニューレを装着して発声可能。やや、聞き取りにくさがあるが、周囲が慣れることで会話のやりとり可能。 ・普通小で、看護師が待機し気管内吸引をしている。医療的ケアを要する健康問題を抱えている事例あり、集団・学校生活上の課題があると考え、介入事例とした。	①状況確認 ・本人より、疾患の理解状況、学校での生活状況について確認することで、本人の理解度や取り組みを知る。 ・他学年の児童やお友達に、カニューレに興味をもたれ、指摘されることがあり、手を出されると「やめて」とはいうが、理由について本人は説明できていない。看護師さんに助けを求めにいき、説明してもらっている、ということがわかった。 ・また、医療的ケア(気管内吸引)が必要で別室に看護師が待機していることがわかった。 ・担任からクラスの児童へは、上記の配慮すべき点については説明されている。 ②介入の内容 上記のことから本人への介入の内容として、学校内で、お友達やはじめて会った子に、「これは何？」と急に聞かれたときに、自分で説明できるようにしてみようと、提案する。 その他、将来的に、自分で吸引するようになっていくのかどうかについて母親に問いかけると、母親は考えてみたこともなかったとのこと→今後、主治医と相談して検討することとする。	①への反応 ・本人は、CNSの持ち物が気になったり、自分の荷物を入れたり出したりして、話しに集中できず。 ・そのような状態でも話しは聞いており、母親に生活状況について尋ねるとして、本人が答え、話しをはさんでくることもある。 ・体調に関して、本人に、具合が悪かったり、吸引が必要な時はどうしているの、と尋ねると、「先生や看護師さんに言う」と答える。担任や看護師に自分から伝えることができていた。 ・本人に、どうして気管切開していたり、吸引が必要なのか知っていると尋ねると「息ができなくなるから、ここ(喉)にくだをつけている。息が苦しくなるので、痰を吸引する」と答える。 ・本人に、困っていることはあるかと尋ねると、「あんまり無い」と答える。 ・母親から、集団生活の中で、お友達のスピードについていけないから、怖いと感じているという話が出たので、本人に尋ねると、「最後にする」と答える。母親によると、自分で考えて、最後に行動するようになったとのこと。母親より、重い荷物は「手伝って」とお願いし、友人に持ってもらうとの情報であった。	①への反応 ・母親は、本人の答えを引きだそうと、CNSの問いかけに対して、言葉を足したり、促したりしていた。本人が真剣に応じていない様子から、母親が答える場面も多かった。 ・母親は、本人が、相手の気持ちを察するのが苦手、というような気になっている。 ②への反応 CNSの提案に対しては、CNSと一緒に本人に、言葉を足して説明している。CNSも、母親と本人で通じあるような、いつも使っている言葉やニュアンスを知るためにも、母親からの発言を促した。	・CNSと本人の会話はかみ合わない部分もあるが、話しは聞いている様子で、CNSと母親が会話していると、話しに入ってくる。このような様子から、母親が心配しているコミュニケーションの課題について母親と共有した。 ・学校内でも、コミュニケーション一方通行になりやすく、かつ、臆せざるもの言うので、周囲の子とトラブルになることもある。母親は、本人にコミュニケーションの課題があることを心配し、この問題のため、ソーシャルスキルトレーニングも受けている。 ・疾患の理解については、今のところ、小学校低学年年りの理解はしていると思われる。人の気持ちや思いを察するのが苦手という課題もある。したがって、集団生活の中で起こりそうな状況について考えてみることを課題とし、少しでも準備性が高まることを期待する。すなわち、CNSからの提案に対して答えが言えるようになる、ということよりも、CNSとの話しを通して、考えてみる機会の提供とする。

介入日	介入コード	介入理由・前回からの評価	実施内容	子どもの反応	親の反応	今回の介入評価と次回への提案
				②への反応 CNSから、今はお友達が〇ちゃんのこと知っているからのどのくたのこと聞かれなくなったかもしれないけど、来年1年生が入ってきて、「これなあにって聞かれたらどうする？」と尋ねると、少し考えて、「看護師さんに言う」と答え、母親から「看護師さんに言うだけじゃその子に伝わらないんじゃないの？」と言われ、「(学校の)看護師さんに聞く」と答えた。CNSからは、本人の答えを受けて、看護師さんに話しをしてみて、考えてきて、と伝えると、「メモしてくる」との答えであった。		
7月	B-c3,5	<ul style="list-style-type: none"> ・体調の変化なく、学校も休みなく通っている。 ・母親は、体力が付き、筋力もついてきたようだと評価している。 ・医療的ケアの面でも、特に困っていることはない。 ・特定の友人とのトラブル(けんか)は絶えない。 ・プールの授業は見学している。母親の話では、最近はプール見学する児童が多く、1人だけ見学という状況でもないで、本人は何とも思っていないようだ、とのこと。 	<p>①前回の提案、学校内で、お友達をはじめで会った子に、「これは何？」と急に聞かれたときに、自分で説明できるように、してみよう、について、どんな風に考えてみたか確認した。</p> <p>②夏休み中であり、本人の集中度も高まらないので、夏休みが終わったら、また考えてみて教えてね、と話し、本日は終了する。</p>	<p>①への反応 このまえ宿題をお願いしたけど、看護師さんに聞いてみたかな？と尋ねると、「(看護師さんのところに)行ってきてきた」、けど、「(その答えを)忘れた」とのこと。 本人は、「なんだっけ・・・」と思い出そうとはするものの、集中が持続せずに、学校のことや、夏休みのことを次々に話します。</p> <p>②への反応 CNSが、では、次の時に教えてね、というと、相談室から飛び出すようにして出ていった。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・本人が本題に集中していかないことに対し、母親が答えを促すなどの声かけをしていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・夏休みになり、学校の話には興味がない、という様子であったで、本日は、深追いせずに終了する。

学童前期2

介入日	介入コード	介入理由・前回からの評価	実施内容	子どもの反応	親の反応	今回の介入評価と次回への提案
11月	B-c3,4 A-3 C-c2	<p>・適度に日焼けし、以前の色白で弱々しい印象が払拭された。</p> <p>・休みもなく学校へ通っている。</p> <p>・「学校楽しい」と本人より。学習の成果として、授業ノートを見せてくれた。</p> <p>・現在は、縄跳びを2回続けて飛べるよう練習中である。神経・筋疾患のため、連続飛びが困難である。</p> <p>・長縄跳びの練習もしている。長縄跳びは、飛ばずに通り抜ける。</p>	<p>①本人の取り組みの確認</p> <p>・CNSからの提案について、「学校内でお友達に、これは何って聞かれることはあった？」と尋ねる。</p> <p>②潜在する課題の確認</p> <p>・疾患に対する受け止めと対処を確認するために、吸引しているところを友達に見られることについて、どのような気持ちをもっているか尋ねる。</p> <p>・授業中に、ゼロゼロしてしまっ、吸引が必要な時にはどうするの？と尋ねる。</p> <p>・内服薬のついて尋ねると、名前と、何のお薬が言えることを確認する。</p> <p>③今後の課題の明確化</p> <p>・母親が休み時間に吸引にいかず、授業中に吸引に行くことから発展して、「本人にもっと真剣に取り組んでもらわない」と話し始めた。このことについて、母親に対して「自分との身体の付き合い方について、成長とともにできるようになっていきますよ」と伝える。</p>	<p>①への反応</p> <p>・「ない」との返事。もし聞かれたら「産まれた時に、息ができなかったので、穴をあけたの、っていう」と答えるとの返事であった。母親に「穴あけた」っていったら、一年生びっくりしちゃうんじゃないの。息が苦しくなっちゃうからついている、がいいんじゃないか」と提案されるが、本人は、あまり納得していないようであり、話題を変えてしまう。</p> <p>②への反応</p> <p>・吸引場面を友達が見ることについては、本人は「うれしい」「嫌じゃない」と答える。疾患に対する受け止めを確認したいというようなCNSの質問の意図をくみ取って答えた答えではなさそうではある。少なくとも否定的には捉えていないことはわかった。</p> <p>・授業中にゼロゼロした時には、「たん取ってきますって言って行く」と答える。教室を出ていくと、みんながいつてらっしゃい、っていう、とのこと。</p> <p>・内服薬について、自信満々に、名前と作用を説明してくれた。</p>	<p>②への反応</p> <p>母親は、授業中に痰を取りに出ることについて、「休み時間は遊びに夢中になって吸引いかなかったりして、授業中に静かになると、音が気になり出して、「看護師さんに、休み時間に引こうね」って何回も言われているんだけどね・・・」と、話す。</p> <p>→③の実施へ</p> <p>③への反応</p> <p>・母親は、気管切開について、数年後に閉鎖ができる可能性が出てきたが、もし、閉鎖できなかったら、修学旅行をどうするか考えなければいけないし、本人にもっと自立してもらわないと、と考えている。</p>	<p>・CNSの提案に対して、そっけないそぶりではあったが、具体的に取り組み考えてきてくれた。本人なりに、自分の身体の状態を考え、理解する機会にはなっと思ったと考えられる。</p> <p>・今後、学年があがり、生活範囲が広がる中で、持ち上がってくる課題について、タイミングをみた支援が必要があると考えられる。</p> <p><全体評価></p> <p>・気管内吸引という、生活の中での実施にリスクが伴う医療的ケアが必要な事例であった。これまでの、医療的ケアに関する調整や発達支援の成果により、考えられる最高水準の教育環境が整っている。また、本人の疾患の理解や、母親の関わりも高い水準で得られていると考えられ、不足しているセルフケア課題への介入というよりも、今の課題を意識して、定着させていく介入内容であった。</p> <p>・今後、生活範囲が広がる中で、課題が生じる可能性があるため、タイミングをみた支援が必要である。</p>

子どもの年齢: 学童前期 病名: 膠原病 介入対象者: 子ども・父・母	面談時間: 20分程度 面談場所: 外来	経過: 治療のため入院を繰り返している。小学校は受診時休むがそれ以外は登校し、体育の時間は見学としている。骨変形につながるような療養生活に対するセルフケアを促すために介入を開始した。
---	-------------------------	---

介入日	介入コード	介入理由・前回からの評価	実施内容	子どもの反応	親の反応	今回の介入評価と次回への提案
3月	C-c4	昨年6月退院後、3回/月の受診を経て、一昨年11月以降、1回/月の受診でPSL減量にとりくみ中 治験薬の選択は、関節炎での再燃か全身症状を伴う再燃かにより異なってくることにについて医師は検討中	同意得られた初回の診察同席子ども、母、父がそれぞれ診察時に発言して診療に参加できるように気配り、目配りしながらコミュニケーション。 特に医師からの会話に対する子どもの反応を観察しながら子どもの発言の機会をつくる。 骨に負担のけない運動について、本人の好みの確認とプールの提案	縄跳びした。え??(縄跳び)だめ? (縄跳びすきなんだよねと母にいわれ顔) …(絶句した後)、 あーよかった、(授業の)大縄跳び、しなくていい! プール、好き。	母「運動は得意じゃないのに、縄跳びは好きだけは好きで練習していっぱいとびました。」「めっちゃ(足首)痛い?」「足はひきずってました…」 父「体育と縄跳びはダメだよ。あしが痛くなっちゃったでしょ。だから縄跳びと体育はダメ。」真剣まなざしで両手に手を添えて話す。 母「3月になったらプールをはじめようかと思っていました。」	主治医が4月から担当医が変わることを説明、現在、の治療方針を両親へ説明する中、子どもも聞いている。両親は、医師から聞いた説明内容を子どもにわかりやすい言葉で説明、特に運動についてはこどもの理解を確認するようにかかわっていた。子どもの疾患の理解とセルフケアを促そうとしている両親の姿勢が確認できた。子どもは療養行動について、聞き返し、自分の中で'おとしどころ'を見出していた。次回、実際の療養行動の変化について確認し、支援していく。
4月	C-c6	3月の受診はCNSは同席できず、本日から、新規主治医に交代して初回。 データ上は大きな変動なく、PSLは7.5mg維持中	新しい主治医とのコミュニケーションを見守り、支援していく 生活と学校生活における運動についての確認、子どもと親の心配事等何かあれば伺っていく 体育休みについてクラス教諭やお友達への説明や理解を得ることに困難や不安等、伺い、必要時支援、医師へも相談。	(診察前) 「プールに通い始めたよ。」 「休み時間にリレーごっこをするのが好き。たいいくでリレーをやっている。」 身長の話をしているときはゲームをしている。 「休み時間のリレーももうしない、大丈夫、旗降って応援する方にまわる。」 <診察時> 「たいいく、しちゃった。」 (前の主治医の先生から体育の御約束は)「'休み'だった。」 「(医師が'信頼しているんだよ'と話しかけると)うん」 はい。わかった。	(診察前)身長が1年で1センチしか伸びていないんです…。ステロイドを飲んでいることはわかっているんですけど、140cmはいいほしい。ホルモン治療とか、あるんでしょうか? <診察時> 母「体育は…痛くないので、やっています。」 「体育休みについては大丈夫です、担任の先生には見学といえ。お友達とも、この子は案外さっぱりしているんで、'自分はやれない'といえば、見る側に回れる、?よね?(と子どもに確認)。その辺はこの子は大丈夫なんです。」 「はい、わかりました。」	縄跳びはやめたが、休み時間のリレー遊びと体育は参加していた。子どもの意欲ややりたいことについて理解すると同時に、将来に向けて、骨変形等につながるような現在の療養について継続して支援していく必要性がある。 身長については、気になっていたけれど、治療中だから医師に相談する優先度は高くないと考えていた母へ、母の療養上、成長発達していく子どもへの不安について自由に語ってもらおうという機会にこそ、このタイミングで話題となったといえる。 次回、母子手帳を持参していただき、身長を曲線状にプロットしていくこととなる。医師が母の不安に理解を示した。

学童前期3

介入日	介入コード	介入理由・前回からの評価	実施内容	子どもの反応	親の反応	今回の介入評価と次回への提案
5月	B-c4 B-p6	運動について 身長について その他について	<p>診察前面接</p> <p>診察前医師と確認;成長曲線では発症後、-3SDに離れてから、その後は順調に成長している。</p> <p>診察同席 RUS 5.6歳 Carpal 5.2歳 20Bones 5.3歳</p> <p>レントゲン検査の意味について子どもと母親に説明</p>	<p>(診察前) 「たいいく、してないよ。げんき。」 レントゲン撮影には、母と共に穏やかな表情で向かう。診察待ち時間はゲームをしている。</p> <p><診察時> (医師から母と子どもへ、'骨のレントゲン結果'説明時)手のひらを目の前にかざし首を傾げ「…?」と不思議そうな表情。CNSが骨の本を提示して、子どもに、先生がレントゲンをとった時には手の中の目では見えない骨をみていることを説明、前のめりで説明を聞いて「わかった」と笑う。</p>	<p>母 「そうなんです、なんで、手のレントゲンとるのかな?って思っていました。」 「身長の方は、ずっと心配していました。」</p> <p>(母子手帳を持参) 「この子は小さく生まれたんです。」 「たしか、NICUは一ヶ月位でした。覚えていないですね。その後いろいろとあるので、書いてあるので、書いてあることが正確です。」 在胎37週6日、出生体重1700g 台、仮死なく出生 横断にて光線療法、体重増加をまち、1か月でNICU退院</p>	<p>レントゲン撮影をする目的について、子どもの反応から、子どもへはもちろん、親へも説明の追加が必要な状況がよみとれた。</p> <p>低出生体重児であったことは今回、情報を得て、009病院の直近のカルテ内では収集できていない情報であった。 子どもと親(家族)の体験、子どもの成長発達と移行期支援を考えていくときに、現病歴と直結しない情報で、重要な情報を全体像から見落としていた。 また、母子手帳の意義を本人、親、医療者の双方にとり重要なものであることを再認識した。 身長については、母と父の身長も情報収集し、今度、子どもと親の希望があれば、小児内分泌の医師に紹介受診予定、看護師のかかわりも継続。</p>

子どもの年齢:学童前期 病名:慢性呼吸器疾患 面談時間:20分程度 介入対象者:子ども・母 面談場所:外来	経過:母親と兄に喘息がある。今回は患児の就学支援を目的に介入する。母親は兄と同じようにすすめていくことを前提に、何か困ったら病院に相談することを考えている。しかし、患児が小学校に向けて、発作が起きたときの対処方法など教育的介入がなかったので、本人を中心に就学支援をスタートすることにした。
---	--

介入日	介入コード	介入理由・前回からの評価	実施内容	子どもの反応	親の反応	今回の介入評価と次回への提案
1月	A-3	4月に就学するにあたり、支援が必要かアセスメントする。	親子そろって面談する。喘息に関しての学校とのやりとりは兄が入学する際に経験したので大体のことはできているが、子どもがどの程度症状に対応したり、予防できるかはわからないと母が話す。	母親と話すときはひとり遊びしている。話しかけると下を向き、言葉は少ない。母親に答えなさいと促されて、はい、いいえ程度を話すが自分の気持ちはいえない。	きつときに人に言わず我慢することが気になる。何か普段から気になることがないか確認すると母親が話し始める。	母親は経験があるので、学校とのやりとりで不安は感じていない。子どもが年齢相応に自立した行動をとるための支援を目指していることを親子に説明し、了承を得て面談を終える。
3月	C-c6, D-c4, D-c5, A-3	就学準備について確認する。本人が薬の準備ができるようになった。きついを人に言えることが増えた。当院に急患で受診するか、近医に受診するかを本人が決めるようになった。と母が看護師に知らせる。親子で意識的に取り組む姿が感じられる。	親子そろって面談する。入学準備について現状を確認する。	母親が看護師にできるようになったことを話していると嬉しそう。しかし、看護師と直接話すときは口数が少なく、母親に答えて欲しいように視線をなげる。母親に席を離れないと言われて座りなおすが、最後までじっとできずにいる。	子どもが答えるのが苦手なので、子どもができるようになったことを看護師に伝える。子どもがそのまま席を離れようとする、あなたの話だから座っていなさいと声をかける。	母親は子どものセルフケアが向上している部分に気づいている。子どもが看護師との会話に向き合っていないときは注意し、子ども自身が医療者とやりとりすることを促している。学校との連携に関しては、今は特に困っていないと判断。入学後の状況を確認する。
6月	C-c6, D-c4, D-c5	入学後の生活の変化を確認する。今回は、発作がでたことで急患外来を受診しているの、体調を見ながら面談をすすめる。	親子そろって面談する。入学後の変化について現状を確認する。	サッカーが楽しい。これからも続けたい。これまでどおり薬を忘れず続けることには同意する。	「姉が習っているのをみてサッカーを始めたいと言った。楽しんで通っている。週に4回、砂埃で発作がでることがあり、心配な面もある。発作が続くならやめさせないといけないかも。」サッカーを始めたいことについて母親は喘息に影響することをききしながらも、本人がやりたいことをやらせたいという葛藤をもっている。子どもと看護師が会話している時は隣に座り見守っている。	体力をつけることは喘息コントロールにも有効である。薬を確実に続けて発作がでるときは相談するようによびかける。本人がやりたいことに取り組める環境をできる限り支援する。

学童前期5

学童前期5

子どもの年齢:学童前期 病名:慢性腎疾患 介入対象者:子ども・母	面談時間:15~60分程度 面談場所:外来	経過:介入時まで8回のネフローゼ症候群発症。内服、安静など指示通りにできているが、再発を繰り返しており本人がどう思っているのかに母親が疑問を持ち始めていた。そのため児自身の病識、セルフケアに対する認識確認から始めるため介入を始めた。
--	--------------------------	--

介入日	介入コード	介入理由・前回からの評価	実施内容	子どもの反応	親の反応	今回介入の評価と次回への提案
9月	B-c3	本人の理解の確認	なんの病気なのかな?	「腰かな?わからないけど、たぶん」 看護師:腎臓っていうんだよ。腰にあるんだ。	不在	保護者により病気や薬についてはいい話しされている様子。しかし症状安定に伴い忘れてしまうのか?成長に伴い理解・解釈のレベルが上がり今まで説明されてきたことと現状の事象がつかない様子であった。自らの体や治療への興味はあるため、児の持っている知識に肉付けする形で支援していく。
	B-c4	本人の理解の確認	・どんなお薬飲んでいるの? ・タンパクはなんで変わるの?	「ネオーラル」(看護師:「それなあに?」)油。あと前に飲んでた薬がある。名前は忘れたけどタンパク出ると飲むの。運動しすぎたりしょっぱいもの食べたりするとね」 「お母さんに手伝ってもらって確認するの。1+は黄緑。3+は緑。10日?5日?3日?続くと病院なんだ。」		
	A-3	本人の理解の確認	なんでタンパクでるか知りたい?	知りたい、知りたい、知りたいにきまってるじゃん。		
10月	B-c3	自分の病気は腰と答えたため、腎臓の位置を認識するため	イラストを用いてクイズ方式で腎臓の位置を確認。他心臓、骨、膀胱のある場所と機能を説明。 その後絵本を用いて腎臓の位置を再確認し看護師と共に学習、共有した。	はじめはごまかしてわざと間違えたりしていた。 「腎臓はここ!!」 「やったー正解?」 正解を称賛するとコミュニケーションが弾み、本人の興味の赴くままに他の体の部分を学習し局部へと進めていった。	不在	本人が持ち得ているあいまいな知識を形にしていく作業を進めていく。
	B-c4	蛋白尿以外の症状についての確認をするため	・おしっこ以外で悪くなった時にわかることはあるかな?	「病名ははじめ変なこと言っちゃたけどネフローゼ」		再発を繰り返している児であるため、今までの症状を自覚症状へと理解で

学童前期5

介入日	介入コード	介入理由・前回からの評価	実施内容	子どもの反応	親の反応	今回介入の評価と次回への提案
			・浮腫・倦怠感について説明	「おしっこチェックしないとわからないよ」 「むくみわからない。」「ふーん。顔がパンパンになったとき入院だった」 「だるい？わからないよ。タンパク出たときは空手休む。学校も休む時はある。我慢できるのにえーって本当は思っているよ」		きる様支援していく。
	C-c4	今までの症状管理の確認と、セルフケアを進めるため	・病気で気を付けることは？ ・内服の継続、手洗い、うがい、マスクについてできていることを称賛した。	「薬飲むしかないんじゃないの？ほか気を付けることなんてないよ」 「そうだ。マスクとかしてる。手洗いやうがいもしてるわ」		セルフケアも意識することなく行えている。今後疾患、内服薬との関連性を理解し、理解したセルフケアとつなげていく。
3月	B-c3.4	前回面談以降3/7再発。プレドニン内服に開始。経過を本人と共に確認するため	経過を症状を含めながら本人の言葉で説明できるよう誘導する。 誤解している認識(嘔吐をして飲み込んだからタンパクが出た、浮腫→太ることなど)を修正した。	「2月に花粉症になり目玉が飛び出そうになりタンパクが出た再発って言われた」 「タンパクが出た理由が分かったんだよ。嘔吐をして飲み込んだから。吐いてもふつうはタンパク出ないの？(誤解を訂正)・・・そうなんだ・・・」 「むくむ？太ること、大きくなること・・・。」(圧痕や眼瞼浮腫について説明)「再発したら急に体重が増えたんだ。おなかやすくてたくさん食べたかったからじゃないかね」	不在	再発を機に本人の持っている断片的な知識を統合できる様関わった。患者の持っている知識を体験した症状に合わせて整理することで理解は得られやすかったと思われる。しかし、誤解している情報もあるため今後も共に整理していく。
	C-c6	再発時の治療、セルフケアについての理解を確認	セルフケアを行ってきたことを本人の言葉で表現できる様誘導。意識できていなかったことは意識づけした。	「タンパク出たから、体重増えないようにお替り禁止、しょっぱいもの禁止、学校お休みしたよ。食欲は自分でないくらいにできるの。おばあちゃ		本人に課せられている制限を症状と合わせ説明することで継続の必要性の理解につながった。しかし、学校生活では自らコントロールすることも課

学童前期5

介入日	介入コード	介入理由・前回からの評価	実施内容	子どもの反応	親の反応	今回介入の評価と次回への提案
				ん家では時間を決めて食べていた」 (プレドニン内服による食欲増進・易感染・安静について説明)明日から学校へいくんだ。おなかすいちゃうの心配だな」		今回介入の評価と次回への提案 題となるため継続していく。
	E-c3	休学中であったため本人の思いと、友達関係を確認	・学校お休みすることでの嫌なことは？ ・お友達はどう思っているの？	「学校をお休み中、友達とは連絡とれなかった。学校の友達は腎臓のことはわからないな。病気で言ってもよくわからないと思うんだ」		学校生活が楽しいものとなるように、本人の困難感の理解と援助を進めていく。
5月	B-c4 E-c2 E-p5	蛋白尿なく通学できている	・学校生活における困りごとを確認 ・症状を児と共に復習(蛋白尿・尿量減少・浮腫) ・他者に自分の病気について説明できるように教員にネフローゼ10問クイズをしてもらうことを宿題とした。	説明を笑顔で聞いている。前回の説明について理解しているようであった。 宿題に対して「えーできるかな？わかった。やってみよう」 ・学校・運動会の練習・体育は頑張っているようである。	・「教員に『ネフローゼは再発すると熱が出るの？』と聞かれたようです」	前回の介入評価となった。症状安定による理解の希薄は見られず、前向きにとらえられていた。
8月		10月に腎生検予定(腎機能評価とシクロスポリン中止目的)。前回(2012年)の記憶は薄い	腎臓のイラスト、腎臓の位置確認を行ったあとクリティカルパスに沿って時系列で説明。 検査までに分らないこと、不安なことは次回再診時に質問とした。	母との同席を希望し、話をそらしながら聞いている様子があった。	不在	次回再診時理解を確認

学童前期5

介入日	介入コード	介入理由・前回からの評価	実施内容	子どもの反応	親の反応	今回介入の評価と次回への提案
9月	D-c3	腎生検目的の入院説明の評価	・本人が思う入院の嫌なこと、良いことを確認 ・嫌なことへの思いを受け止め共有。本人の不安の軽減を図れるよう問題解決を図った。	「嫌なことはご飯が決まった量、寝っ転がってうんち、点滴。いいこと、病気が治る、腎臓が少し良くなる、薬がなくなる」 「がんばれます」	面談前に本人が今回の入院を拒否していると の相談があった。	前回の面談時の腎生検の説明に対しては理解が得られていたようで検査に対する恐怖心、拒否はなかった。良いことに対しては治療入院が多かったせいか今回のような回答になったため。検査目的であること、期間、メリットについて再度説明した。 児の思いの表出と納得が得られるように児のニーズに合った返答をすることで「がんばれます」との回答に繋がったと考える。
	B-4.5 B-p7	プレドニン内服について誤った知識あり修正	プレドニン内服の目的について確認。副作用について表現できず、改めて説明。情報整理を行った。	プレドニンはタンパクが出たら飲む薬。ご飯が食べられるようになる。(他の副作用について)「なんかあったっけ?」	・「プレドニン終了して食が細いからプレドニン内服したら食べられるから、飲みたいというんです。家でも説明したんですけど、わかっているのかどうか…」 ・見守りながら聞いている。	以前にも説明してきたことであるが、内服終了とも理解が薄れるようである。家庭での継続的な介入もされており、適時確認が必要であろう。
11月	E-c2	腎生検入院が引か血腫のため長引いての退院であった。現在も安静目的にて休学中	学校を休学していることへの思いを確認	「休みすぎでずる休みしていると思われていないかな。みんなから手紙はもらったけど、1年に1回はもらっているようなもの。入院しちゃっているし。さぼっていると思っている人いるかもしれない。やだな。」 「また入院になったりするの嫌だし、病院来るのも嫌だ」	不在	児の思いを傾聴。 今回は再発ではないこと、本人の頑張り反して入院や安静が長くなっており頑張っていることを認めた。受診＝入院でないことも理解が得られた様子。

学童後期1

学童後期1

子どもの年齢:学童後期 病名:慢性消化器疾患 介入対象者:子ども・母	面談時間:5分~30分程度 面談場所:外来	経過:臓器移植後であり、現在は免疫抑制剤を内服している。定期的に採血と放射線検査を受けているが、特に副作用や症状は生じていない。小学校高学年になり本人の自立を目指し介入となった。
--	--------------------------	---

介入日	介入コード	介入理由・前回からの評価	実施内容	子どもの反応	親の反応	今回の介入評価と次回への提案
11月		<ul style="list-style-type: none"> 学童後期で移植後であり、本人の病気の理解や、セルフケア状況を把握する必要があった。 	<ul style="list-style-type: none"> 本人は採血後、学校行事参加のために戻ってしまったため、母とだけ話をした。 母から本人の病気の理解やセルフケア状況を確認した。 	不在	<ul style="list-style-type: none"> 両親が仕事で忙しい時期があるので、本人に何でもやらせている。病気も理解できていると思うと話す。 学校行事もなるべく参加をさせているということ。 	<ul style="list-style-type: none"> 母の話では発達に合わせて病気の理解やセルフケアが進んでいるようである。しかし、実際に本人がどのように理解し、取り組んでいるかは分からないので、次回は本人に確認をする。
8月	B-c3,4,5,6 B-p6,7	前回と同様	<ul style="list-style-type: none"> 本人の病気の理解や思いを把握するために、図を用いながら臓器と病気の説明した。 	<ul style="list-style-type: none"> 母は、病気について本人は理解していると話していたが、本人は「(病気について)よく分からない」。看護師「〇〇(臓器)の位置は？」本人「知らない」。看護師「病気はなんだったか知っている？」本人「知らない」、看護師「手術をしたのは知っている？」本人「・・・」と、病気の理解はまだ不十分であった。 	<ul style="list-style-type: none"> 母は傍で、本人と看護師の話に口を挟まずに聞いてた。途中で看護師に移植については、小さかったので知らないと思うと話した。 	<ul style="list-style-type: none"> 母の認識より、本人の病気の理解は不十分であった。 母は看護師と本人の会話に口出ししない姿勢であり、本人の自立を促している印象を受けた。 看護師も本人に説明をしつつ、母にも本人の気持ちや理解状況を把握してもらう必要がある。
		<ul style="list-style-type: none"> 本人が内服薬と作用を知っている必要がある。 移植後であり、生活上で体調管理ができる必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 病気の説明と共に、内服薬の名前や作用について本人に確認をした。 本人は「(生活で)気を付けていることがない」と話した。内服薬が感染力を下げる作用があるため、日常生活で感染予防が必要であることを伝えた。 	<ul style="list-style-type: none"> 看護師「薬は何をのんでるの？」本人「〇〇と△△」、「(薬の作用は)知らない」。 薬は自分で準備してのんでいる。「忘れちゃうこともある？」と、聞くと笑っている。 生活で気を付けていることはないと言っていた。本人に感染予防について説明をしたが、薬の作用の話自体も同日であり、理解はまだ不十分である様子であった。 	<ul style="list-style-type: none"> 母は薬が残っていることはないと話し、薬を自分で管理ができていると話していた。しかし、薬の作用までは伝えていなかったようであった。 	<ul style="list-style-type: none"> 本人は薬の名前を言えたが、作用理解は不十分であった。内服は忘れることが時々あるかも知れないが、ほとんど自分で管理できているよう。 薬の作用については次回に再度、説明をする。 生活上での運動面など制限もなく生活をしているが、移植後の注意をきちんと本人が知っておく必要がある。次回、再確認する。

介入日	介入コード	介入理由・前回からの評価	実施内容	子どもの反応	親の反応	今回の介入評価と次回への提案
	E-c1	・本人が学校生活上での病気に 関する調整ができる必要 がある。	・学校生活の通院や療養の調整状 況、友達との関係を確認した。	・「(学校は)楽しい」。通院でお休 みが多くなっている教科があるが、 困ってはいないということ ・友達に病気のことを聞かれたこと ある? 「ない」聞かれたらどう説明を する? 「……」		・通院を平日に定期的に行っているが特 に学校では困らずに生活できている ようである。しかし、友達には通院の ことなどを伝えておらず、今後、本人 の病気への気持ちを確認しつつ、友 達との関係を把握していく必要がある。
9月		・他院で久しぶりの検査入院 予定であり、本人の準備状 況を確認する必要がある。	・時間がなかったが、数か月後に他院 で検査入院があるため、心配なことを 確認をした。 ・流れや内容の予定を母に確認しつ つ、本人の反応や理解状況を把握し た。	・幼児期以来で、本人も入院経験の 覚えがないが、「(検査入院につい て)心配なことはない。」と話す。 ・母が看護師に説明する内容も淡々 と聞いている。	・母が看護師に検査の 流れを話しており、本人 と同様に心配はあまりな いようであった。	・内服や外来通院はあるが、入院や 大きな処置経験は記憶の中ではない 様子である。イメージも湧いておら ず、今回の検査入院を通して、病気 のこの理解をさらに促すきっかけに する。検査後に確認していく。
	B-c3,4,5,6	・前回、薬の話をしており、そ の理解状況を確認する必要 がある。	・前回、次の時に薬の内容を確認する 約束をしたことを覚えているかを聞く と、忘れていた様子。 ・図で病気と薬の説明をした。 ・臓器移植後の免疫抑制剤の内服の 必要性和免疫力の低下について説明 をした。今回、歯痛で受診をしており、 齲齒予防や予防接種が必要なことも 伝えた。	・看護師の「〇〇と△△は何のため の薬か知っている?」の質問に、本 人「知らない」 ・病気の話にはうなずきながら少し 理解が難しそうな印象を受けた。し かし、手洗いやうがいが必要なこと など、具体的な行動については理解 できたよう。	・児との話の時に、母は 会計のために不在で あった。	・免疫抑制剤については、移植臓器 のことに共に、時間をとって説明をし ないと理解が十分できないよう。次回、 説明内容の理解状況を確認したほう がよい。
10月	C-c6	・前回、免疫力の低下につい て理解ができているかを確認 する必要がある。	・短時間であったが、歯磨きをきちん としているかを確認した。再度、予防が 大切と伝えた。	・歯磨きをしていると話す。	・母もそばで聞いてい た。	・日常生活上でトラブルをきっかけに、 病気の理解を促す方法は有効であ る。母からもそれを伝えてもらう必要 がある。

学童後期1

介入日	介入コード	介入理由・前回からの評価	実施内容	子どもの反応	親の反応	今回の介入評価と次回への提案
11月		・予防接種のための受診時に母から話があった。	・予防接種受診時に、かかりつけ医をどのように作っていくか母から相談があった。 ・かかりつけ医をつかっていく大切さと共に、大変さも確認した。そして、必要時主治医との調整をすることを伝えた。	・本人とは話をできず。	・体調に問題がなく、小児科のかかりつけ医にかからなくなっていた。今回、近所の病院で予防接種を受けようとしたら、臓器移植後という理由で断られてしまったということ。長期的にかかりつけ医を継続することが大切であるが、難しいことであることを一緒に認識した。	・かかりつけ医を持つことの大切さを母と一緒に確認をした。また、必要時、主治医と調整をしていく。

以後、課題について継続的に介入していく必要がある。

学童後期2

子どもの年齢:学童後期 病名:慢性消化器疾患 面談時間:20分程度 介入対象者:子ども・母 面談場所:外来	経過:幼少期に根治術後、定期的に採血と放射線検査、内視鏡検査を受けている。小学校高学年になり本人の自立を目指し介入となった。
---	--

介入日	介入コード	介入理由・前回からの評価	実施内容	子どもの反応	親の反応	今回の介入評価と次回への提案
12月	A-3	・学童期後期であり、医師に自分で病気のことを伝えられるようになる必要がある。診察では、病気のことではなく、骨折の話を医師にしていた。	・診察後に母に自分で自分の体調や症状を話せるように練習することが大切であること、親が話すことが当たり前となってしまう、成人になっても話をできない方もいることを伝えた。	・本人とは直接話しをできなかった。	・子ども自身が医師と病気の話ができるようにはとを考えていなかったようで、看護師の話に驚くようにならずにいた。 ・本人が症状などについて話す必要を強く感じていなかったようだが、骨折をしたことなど日常のことを伝えるようには練習をしてきていたと話した。	・母は本人が医師と病気の話をする必要性を感じた様子であった。次回、具体的に本人が何を話すかは相談をする。 ・そして、本人に体調や学校で困ることなどを医師に自分で伝えていくことが必要であることを伝える。
		・学童期後期であり、自分の病気を理解し、説明できるようになる必要がある。	・本人が病気をどのように理解し、説明ができるかは分からないため、次回確認をしながら、本人に説明をすると伝えた。	・本人とは直接話しをできなかった。	・病気の理解は母はできていると話したが、実際の本人の理解は確認できなかった。	・次回、本人から病気の理解状況を把握する。
	C-c5,6,7	・学童後期であり、本人の能力に合わせて内服管理をできるようにする必要がある。	・自分で薬の管理を行えることが大事であると、母に伝えた。	・本人とは直接話しをできなかった。	・最初は、「親が薬の準備をすれば、本人はのめる」と話していた。しかし、「でも、この子はのんびりだなあ、下の子なら自分で薬を準備することをしている」「宿泊の時には自分でのめた」など、母自身で振り返っていた。「(自分ひとりで管理できるように)少しずつ促します」と話した。	・本人の能力に合わせて自己管理を促す必要があるが、本人の能力を今回は把握できなかった。しかし、母の認識の促しにはつながっていた。 ・今回は本人の内服の理解状況を把握していく。
3月	B-c4	・前回の診察後、母に医師と本人が話をすることが大切であると伝えた。今回は本人に介入する必要があった。	・診察時に医師からの質問に本人が返答しており、看護師も本人に話すことは大事と伝えた。診察後に、母と本人が医師と話ができていたことを共有した。	・診察時に、医師から症状について質問をされると言葉少ないが返答をしている。今後の検査の時期なども、自分の希望を医師に伝えていた。緊張感も強くない様子で、言葉は少ないが返答をしていた。	・診察時に、母は本人に返答を促していた。「答えられていましたね」と、診察後に看護師に話した。	・母が本人に伝えたようで、本人が医師の質問に答えることができていた。母も本人の返答を促していた。 ・今回は自らが疑問をもち質問をする様子はなかった。静脈鎮静下での検査について心配なことは「ない」と話し、経験があるからか平気な様子であった。

学童後期2

介入日	介入コード	介入理由・前回からの評価	実施内容	子どもの反応	親の反応	今回の介入評価と次回への提案
8月	A-3 B-c3c4c5c6 D-c3 D-p6	・診察時、医師に質問をすることはできていたが、内容は病気の症状や治療への参加までは十分ではなく、病気の理解を深める必要があった。	・本人に図を用いて、臓器と病気、薬などについて説明をした。本人に問う方法で確認、説明をしたり、思いを確認した。 ・母は児に説明をしていると話していたが、具体的な理解が不十分であることを母が気づけるようにした。 ・本人の特徴として、良い点と弱い点を母と一致させた。そして、その点に家族が気を付けて関わることをすすめた。	・病気の部位や症状の質問に対して、すぐに返答が出てこないことが多かったが、ゆっくりながら話してもいた。思いはなかなか表出されなかった。 ・病気について「腸をつかってつないだんだよね」と話す。〇〇(二次障害症状)については分からず。内服の作用についても分からず。 ・薬の内服については、親が準備していないと「(のむのを)忘れちゃうかもな」と話す。薬の名前と作用は分からず。	・母は看護師と本人との話に口出しをせずに、「考えていること言ってごらん」と、フォローをしていた。しかし、返答がスムーズでなかったため、後程、本人に確認し、「恥ずかしかったから」と言っていたと、理由を看護師に伝えてきた。 ・本人が返答できない様子をそばで聞き、後程「そっか、あまり説明をしなかったな」、「そっか、この子聞いてくることないかも。なんで?とか」と、説明状況や、本人があまり疑問を持たないことに気づいていた。	・本人の病気の理解について状況を確認し説明をした。 ・母は病気について伝えてあるという認識であったが、具体的に理解できていないことと、本人が疑問をあまり持たないことに気づいた。そして、本人の「恥ずかしかった」という理由を確認しながらも、自分で病気のことを他者に話すことは難しいことも認識していた。 ・そして、今後、行っていくことを家族と看護師と考えられた。 ・次回は今回の説明をどの程度理解できたかを確認する必要がある。
	D-p6	・本人が体調が悪くなることもほとんどなく過ごしているが、学校内での状況を確認する必要があった。	・本人に友達に通院をどのように伝えているのかなどを確認した。	・病気について友達に聞かれたときの返答については「考えたことがない」と話し、学校を一日休んで外来受診をして、質問されないようにしているということ。	・本人が答えられない様子を見ながら、「どう考えてるの?」など、聞いていた。 ・母の話では、外来日に半日遅刻することなどは、周囲から聞かれるのが嫌なようで、一日休んでいるということ。	・看護師との話の状況から、本人があまり疑問や不満を持たずに今の状況、治療を受け入れていること、友達には知られず、学校でも困らずに生活していることを、家族と確認できた。 ・学童後期であり、通院がある事や病気のことを周囲にどのように伝えていくかを考えていく必要がある。
9月	E-c3 E-p7	・原疾患による感染症で緊急入院をした。今まで感染症による入院はなかった。 ・検査のための短期間入院時も、学校を休んだことはなく、体調も崩したことがなかったため、本人の気持ちを確かめる機会として適切なタイミングであった。	・母と看護師だけで先に話をする機会があり、母の今回の入院への思いを聞いた。 ・母は今回の入院を友達に伝える良い機会ととらえていた。本人と相談をするという母は話しており、伝え方を母と相談した。 ・本人には体調の確認、学校をしばらく休むことについて思いなどを聞いた。	・本人は「こんなに入院したことないから。運動会もできないかな。」「検査のためにまた入院しなくちゃいけない。」など、病気や自分の思いについて少し話をした。 ・学校を休んだことを、友達にどう伝えるかには返答はなかったが、絶対に知られたくないという思いはないようで、あまり深くは悩んではいない印象であった。	・母は「学校を急に休んだので、病気は隠しきれないし、本人にはいいきっかけだと思う。」と、今回の入院をきっかけに、病気のことを友達には伝えていない状況について、話をされた。そして本人と説明方法を考えるという話であった。	・入院で学校を欠席をし、周囲に病気を伝えていく機会と母が捉えて、本人に働きかける姿勢があった。 ・本人は強い拒否感はなく、この児なりに周囲に知られていく、伝えていくという印象を受けた。 ・入院について学校の友達と話をしたかを次回確認する。また、検査を含めて今回の病気の状況について理解状況を確認していく。

以後、課題について継続的に介入していく必要がある。